

メッセージアウトライン

ヨハネ11：1～16「神の栄光のため」

「ラザロ」→エルアザル(神は助け)の意。彼は病気であり、マリヤとその姉妹マルタの兄弟であった。→ルカ10:38~42「ベタニヤ」→エルサレムの南東約3kmの村。マリヤは主イエスに香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐった女性である。(12:1~3)イエスと弟子たちはエルサレムに来るときは、しばしば彼らの家に滞在し、親切なもてなしとくつろぎの時を持っていたものと思われる。

彼女たちはラザロのためにイエスのところに使いを送った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気で」(3)しかしイエスは言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです神の子がそれによって栄光を受けるためです」(4)イエスはラザロの病気が死に至るものであることを知っておられた。しかし、ラザロの死はそれだけで終わってしまうことなく、神の栄光、神の子の栄光へとつながっていくものであることを教えられた。【栄光】→そのものの持つ卓越したすばらしさ

しかし、どのようにしてその栄光が現されるのか。①ラザロがイエスによって死よりよみがえらされることにより、人々が神と神の子イエスのことをほめたたえ、その栄光が現される。②真の意味でイエスが栄光を受ける時とは、イエスが十字架につけられ、死なれ、その後、天に上られる時である。→ヨハネ12:23~24つまり、ラザロが死んでイエスが彼をよみがえらせることによって、それがイエスを殺さねばならないというユダヤ教の決議に連なり、最終的にイエスを十字架へと進ませることになる。このことをイエスは言っておられるのである。

イエスは彼らを愛しておられた。(5)この場合の「愛」とは人間的恋愛感情ではない。相手のことを心配し、大事に思う気持ち、相手のために自分を犠牲にしてもよいという思いを含む意思の力である。それならなおさらすぐに行ってやったらと私たちは思う。しかしイエスは決してそのような人間的思いだけで行動されるのではなく、常に父なる神のみこころに従い、ご自分の時を見きわめて行動されるのである。そのようなわけでイエスはなお二日その場にとどまられた。(6)「その後、イエスは、『もう一度ユダヤに行こう。』と弟子たちに言われた。(7)つい数日前に石で打たれそうになったのに(8)、といぶかしむ弟子たちに対してイエスは「昼間歩けばつまずくことはない」(9)と言われた。これは父なる神のみこころに定められたときが来るまでは何も起こらない。イエスの身に危険がおよぶことはないということである。しかし、神の定められた時、「夜」(10)が来れば、イエスは敵に捕らえられ、十字架への道を進まれるのである。→13:27

イエスはラザロの死のことを「眠っている」と表現されたが弟子たちはその意味することがわからなかった。(11~13)そこでイエスははっきりとラザロが死んだことと、「あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいきます」と言われた。(14~15)死んで四日(17)もたっているラザロがよみがえらされるならば、その出来事は弟子たちのイエスへの信仰を大いに強くすることは間違いがない。そのような意味でイエスはこのことばを言われたのである。 私たちも神のみことばである聖書を日々読み、祈り、神のみこころを知り、神のみこころの時に行動し、私たちの生き方、行いをとおして神の栄光をあらわす者となりたい。 → Iコリント6：19～20